

学 位 論 文 要 旨

氏 名 桑原晴子

題 目 身体とイメージの関連性に関する心理臨床学的研究—共時性の視点から—

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究は、身体とイメージがどのように相互関連しているのか、そして「意味のある偶然の一致」かつ「非因果的連関の原理」としてJung(1952/1960)が定義した「共時性」という視点が、その関連性を理解する上でいかに有効であるかという点について、事例研究を通して検討したものである。

まず、第1章では、身体とイメージの関連性に関する分析心理学的研究を展望したうえで、先行研究の問題点と今後の課題をまとめ、本研究の目的を述べた。共時性という視点から身体とイメージの関連性を理解することは、因果論的理解ではいきづまる事例で生じているプロセスの意味を考えるうえで意義をもつと考えられる一方、先行研究において具体的な事例に基づいて論じられていない点を問題点として指摘した。そして、①イメージ内容の変化、②イメージ体験の身体的側面、③面接のプロセスで生じる身体症状、④身体的逆転移の4つの次元が心理療法のプロセスの中でどのように相互関連していくのかについて明らかにすることが今後の課題であり、そのために最も適切な方法が事例研究法であることが論じられた。

第2章の研究1では、3つの事例研究を通して、箱庭、そして夢というイメージを用いた心理療法において、イメージと身体の諸相がいかに関連しながら変化するか、そして共時性の視点がその連関の理解にどのように有効であるかという点について検討することを目的とした。その結果、①イメージ内容の変化、②イメージ体験の身体的側面（箱庭のリズムや砂の触れ方、夢の実感）、および③面接のプロセスで生じる身体症状（身体的変化）の3つの次元は、常に相互関連しながら、変容していくこと、その相互連関は、いずれかが他の変化の原因になるというよりも、共時的な変化として理解できることが示唆された。そして、その共時的な変化に着目し、「意味のある偶然の一致」の心理的な「意味」を内省することが、クライアントのあり方やセラピーの展開を理解するうえで意義を持つことを論じた。さらに、3つの次元のうち、どの次元がより活性化されやすいかは、クライアントが生きているテーマによって異なることが示唆された。このように、共時性という視点は、こころとからだの複数の次元に現れてくる変化を全体状況とつなぎ、その意味を理解するという心理臨床的姿勢を促進するという点においてこそ、意義があることを論じた。

第3章の研究2では、④身体的逆転移に焦点を当て、セラピストに生じる身体症状や動きをイメー

ジとして体験することの意味と、その際に求められるセラピストの臨床的態度について検討した。その際、日本の心理療法における身体的逆転移の特徴と、相談室モデルとアウトリーチモデルという心理臨床実践の場の特徴による相違について検討を行った。その結果、身体的逆転移を、クライアントとセラピストの関係性の身体、つまりイメージとして捉えることが重要であり、その身体的逆転移と共時的に生成するイメージの自律的生成を見守りながら、その両者の共通点や意味を内省する、セラピストの内的な作業がクライアントの理解を促進すると考えられた。また、無意識的一体感を基盤とする日本の心理療法においては、欧米における心理療法とは異なり、身体的逆転移を直接クライアントとの間で言語化して話し合わなくても、セラピスト側の理解の変化は、非言語的な態度の変化としてクライアントに伝わり、それが心理療法のプロセスに活かされる可能性が示唆された。さらに、身体的逆転移をどのように心理療法の中で活かすかは、相談室モデルとアウトリーチモデルでは異なる可能性が示唆された。アウトリーチモデルにおいては、クライアントの象徴化能力に問題がある場合など、身体的逆転移を言葉にして共有していくセラピストの能動的姿勢が、短時間の関わりを通してクライアントとの関係性を築き、適切な援助につなげるうえで有効であることが示唆された。

第4章は、2つの研究の成果をまとめ、クライアント、セラピストのこころ、からだ、およびイメージの間の関連性について包括的に説明するモデルを探索的に作成した。①イメージ内容の変化、②イメージ体験の身体的側面、③面接のプロセスで生じる身体症状という、3つの次元の共時的な相互関連について、詳細な事例研究に基づいて明らかにしたこと、特に、③面接のプロセスで生じる身体症状について、他の①イメージ内容の変化や②イメージ体験の身体的側面と相互関連していることを明らかにしたのは、先行研究ではほとんど焦点が当てられていなかった結果であり、本研究の新たな知見といえる。さらに3つの次元のうち、どの次元が前景化するのかに影響する要因として、クライアントの生きている固有のテーマを示唆することができた点、④身体的逆転移の特徴に関して、文化差や心理臨床実践の場の特徴という点から比較検討を行い、その特徴を明らかにしたうえで心理臨床の場の特徴や関係性のあり方に応じて柔軟に活用していく必要性を提言した点も、本研究の成果であるといえよう。最後に、本研究の問題点と今後の課題について、事例数の少なさと偏りを挙げ、今後さらに事例研究を積み重ねて、今回作成したモデルを精緻化していく必要性を指摘した。